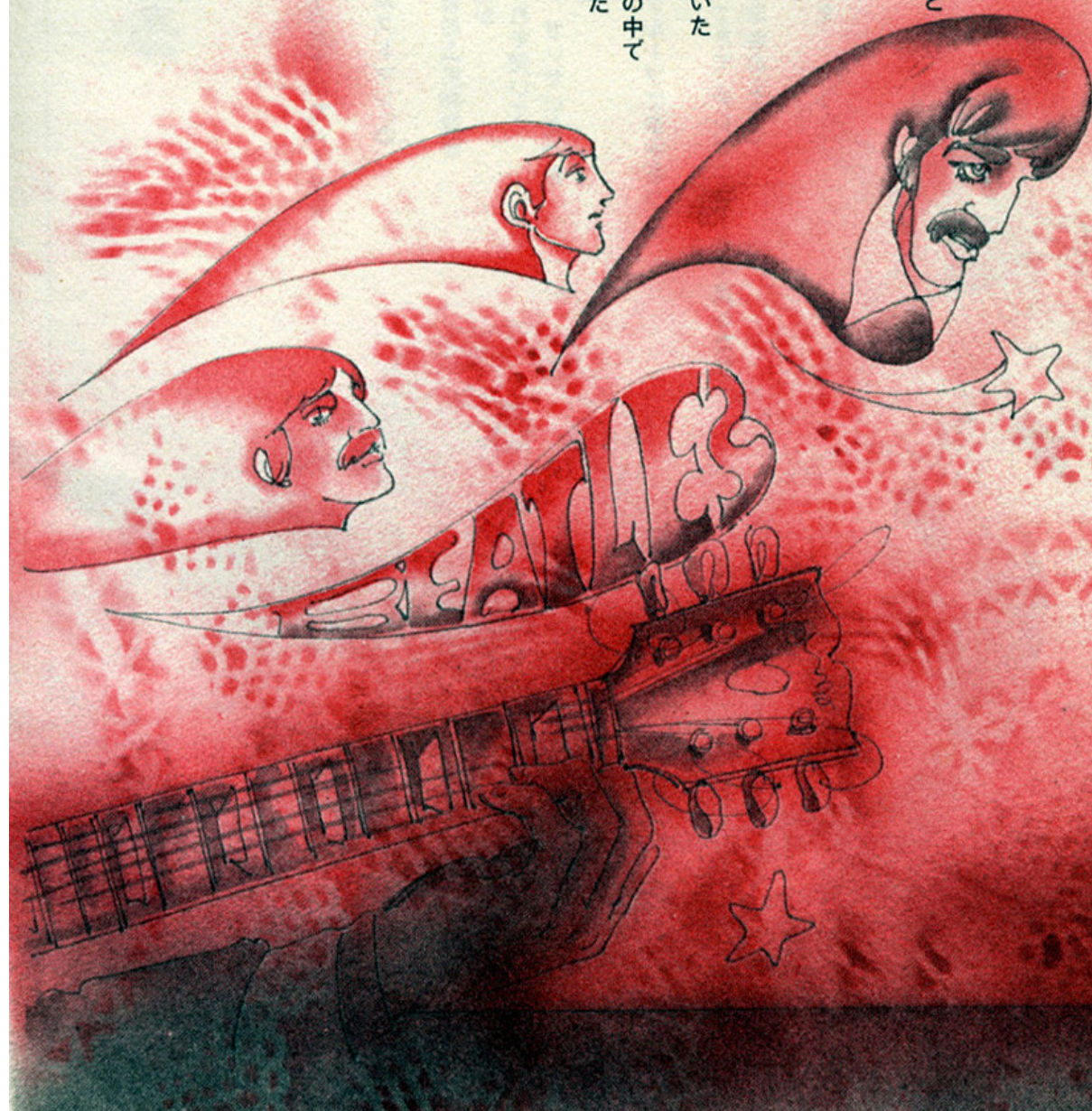
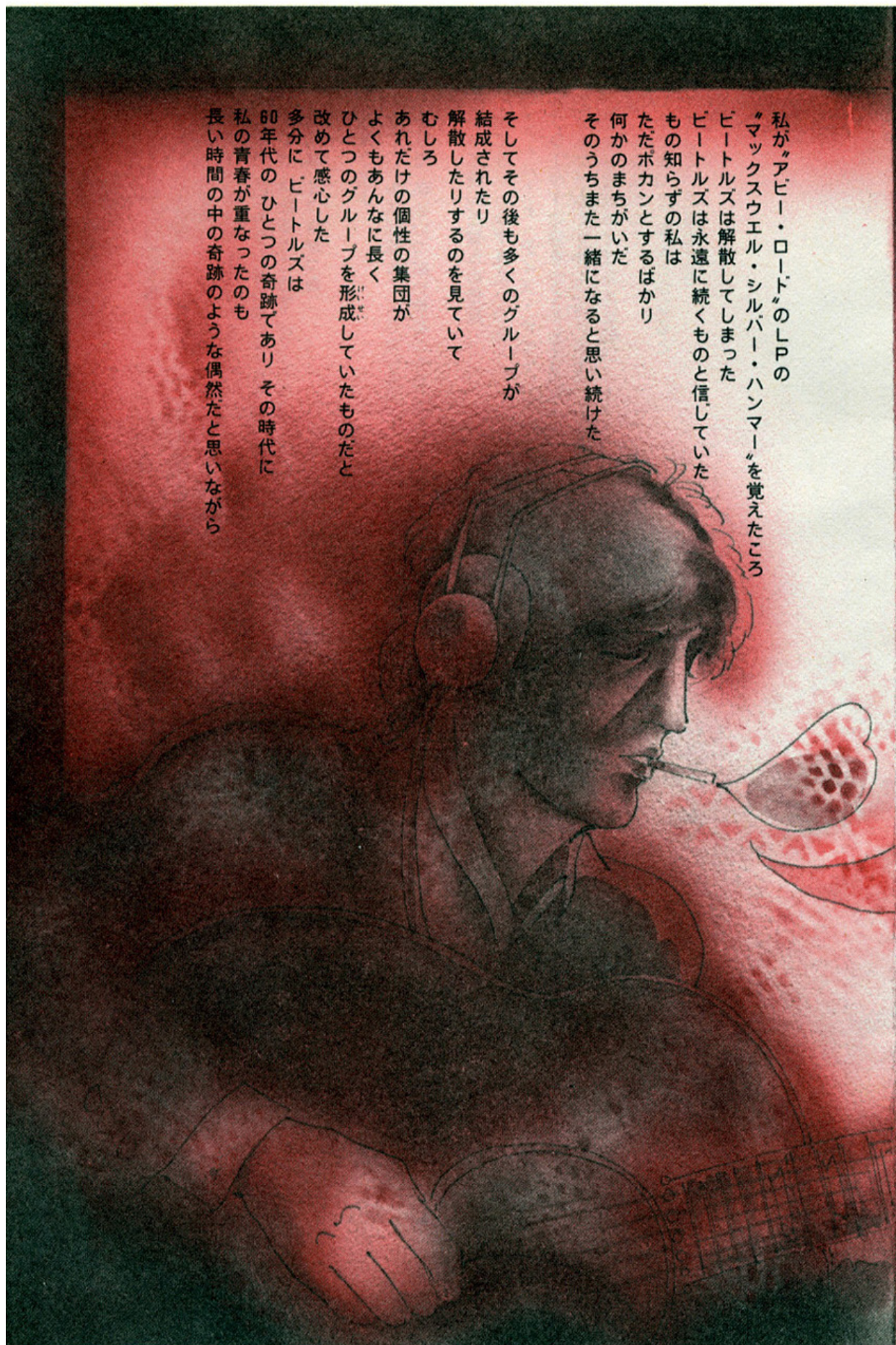
●イラスト・エッセイ●

ビートルズのころ

私は音痴だった
中学のころ学校では禁じられていたパーマを
かけていた友人が
〝プリーズ・ミスター・ポストマン〟の
EPを貸してくれた
覚えようと思ったが　和音の上に和音が
フレーズの上にフレーズが
もようのように重なるそれを聞いて
胸がしめつけられるのが　せいぜいだった
クラシックを愛する父は
おまえが大人になったら
若いころは　くだらないグループに夢中だった
と思うだろうよと言った
ビートルズは日本にやってきて　テレビニュースで流したが
遠いくにで行われている革命のように
家ではだれも
気にとめる人はいなかった

高校のころ
当時はめずらしい
エレキ・ギターをもっているグループと
知りあった
アマチュアのサークルで
彼らはビートルズを歌っていた
「このバックに高く流れるバイオリンが
ホラ、いいんだよな」
などと語るので
なんと耳のいい人たちなのだろうと驚いた
友人と一緒に
〝ヒア・ゼア・アンド・エブリホェア〟の中で
かすかなカスタネットが鳴る音を数えた
卒業後は　別れていったが
教えてもらったビートルズは残った
いい子供でも　いい生徒でも
なかった私が
学校にも家庭にも
無言で反発し
友人と読書とマンガとビートルズに
はけぐちを求めていたころ

私が〝アビー・ロード〟のLPの
〝マックスウエル・シルバー・ハンマー〟を覚えたころ
ビートルズは解散してしまった
ビートルズは永遠に続くものと信じていた
もの知らずの私は
ただポカンとするばかり
何かのまちがいだ
そのうちまた一緒になると思い続けた
そしてその後も多くのグループが
結成されたり
解散したりするのを見ていて
むしろ
あれだけの個性の集団が
よくもあんなに長く
ひとつのグループを形成していたものだと
改めて感心した
多分に ビートルズは
60年代の ひとつの奇跡であり その時代に
私の青春が重なったのも
長い時間の中の奇跡のような偶然だと思いながら

1980年の12月8日に
ニューヨークで ジョン・レノンが撃ち殺されたという
ニュースが伝わってきて
デマじゃないのと言ってるうちに
どのテレビもラジオも同じことを言いだした
街では いたるところで ビートルズが流れ
音楽は せつなかった

拓郎の歌う
〝ビートルズが教えてくれた〟を思い出して
そうだ 私もいっぱい教わったわ と思った

夢中で読んだ彼らの伝記
親にないしょで見にいった
〝ア・ハード・デイズ・ナイト〟〝ヘルプ〟
プレーヤーの音をひくくして真夜中
身をかがめくりかえし〝リボルバー〟を聞き続けた
確かな音楽のてごたえに酔い
こんな私だって
今にきっと なんとかなると
信じていたあのころ

〈おわり〉

フォアレディ 1981年3月号に掲載